

## 第 78 回企画展

「東北地方の玩具たち — 東日本大震災を忘れない —」より“こけし” 幡鎌 真理 Mari Hatakama

今回の展覧会では、東北地方の郷土玩具を木、土、紙の3つの素材に分けて展示した。そのなかから特徴的な資料を紹介したい。

まず、東北地方の木の素材を代表する玩具と言えば“こけし”だろう。“こけし”と言われて皆さんが頭に思い浮かべるフォームは各人異なるにちがいない。“こけし”は11種類あると言えば驚かれるだろうか。「丸い頭と円柱形の胴体で、おなかに何かの模様があって、ニッコリ笑っているアレでしょう」と。“こけし”なんてどう考えても1つだと思われるかもしれない。ある人が考える“こけし”は胴がやや太く安定していて、その胴には華やかな花模様が描かれているかもしれない。別の人は、“こけし”は立ちにくくて、筆筒の上に置いてもすぐに倒れるものだというだろう。「たしか昔おばあちゃんの家飾りにあったこけしの胴は横縞模様だった」と思い出されるかもしれない。前者は鳴子系こけしをイメージし、後者は土湯系を指している。“系”を付けたが、“こけし”は産地によって11の系統に分かれる。これが“こけし”には11種類あるという意味で、各々個性的だ。全系統を並べれば、一目瞭然にその違いを理解してもらえよう。

では、“こけし”はいつ頃からあるのだろうか。信仰に関わるもので、おしらさまのように東北地方に古くから存在したと思うかもしれないが、比較的歴史は新しく、江戸時代の文化文政(1804～1830)頃からあらわれたのであろうと現在考えられている。この時期は政治経済が安定し、農閑期の湯治の習慣が定着した。東北各地に点在する湯治場は賑わうようになり、その土産物の木地玩具として誕生した。それ以前から東北地方には堤人形や相良人形、花巻人形といった土人形が先行して存在しており、販路は大きかった。山間では身近な素材は木であり、盆や椀を挽く木地師ならば人形を挽くのはたやすかっただろう。明治時代の少女は“こけし”に着物を着せておぶって遊んだ。NHKの有名な連続テレビ小説「おしん」でも“こけし”は重要なファクターだった。咸臨丸がアメリカに向けて浦賀を出港した万延元年(1860)に書かれた「萬挽物控帳」という文書が残っている。そこには“こけし”を「人形」と呼び、作り方や大きさ、大きさごとの価格表が記されている。実物は子

どものおもちゃという性格上、江戸時代のものが現代まで残ることは稀である。古くなったこけしは風呂の焚きつけに丁度よかつたのだと古老から聞いた。信仰に関わるものならば、そのような処分はまずしない。

“こけし”という呼び名にはなぜか根拠のない忌まわしい話がつきまとう。意外にも“こけし”名称自体が新しく、昭和15年に愛好家や作り手が話し合って決められた。それまでは東北各地で呼び名が異なり、「キボコを作ってくれ」と木地師に頼んでも意味が通じず、実物を見せると「なんだ、デコのことか」とすぐ作ってくれたそうである。“こけし”の頭の赤い手絡てがらと呼ばれる模様は少女の髪飾りを表現するが、元々は御所人形の水引手に由来する。あらゆる人形のなかで最高級とも言える御所人形は、貴族あるいは参勤交代の途中や任官の挨拶で御所に参内した大名に、天皇から下される桐製の人形で、三頭身の愛らしい男児の姿をしている。頭には前髪を赤い紐で結んだ「水引手」と称する模様がある。いわゆる熨斗の水引である。堤人形にもこの模様があり、土産物に縁起の悪いものがあるはずもなく、“こけし”に忌まわしい謂われは全くない。

明治10年代に関東から東北に足踏み轆轤が伝わった。それまでの、一方が綱を引いて軸を回転させ、もう一人が回転にあわせて刃物をあてて削る二人挽き轆轤と違って、一人で自由に操作できるように生産性が飛躍的に向上した。一層“こけし”は近隣に広がり、各地の木地師が工夫を凝らした。その工夫が産地の風土や生活と互いに影響しあって、形態、構造、描彩の様式に特色が生まれる。その特色が産地の約束事となって伝承され、今日に至っている。これが“こけし”の系統である。中心となる地名を冠して、宮城県の蔵王山麓にある遠刈田温泉なら「遠刈田系」、福島県の土湯温泉なら「土湯系」と称する。今回の展覧会では「遠刈田系」と「土湯系」を取り上げた。遠刈田系はまっすぐな胴に大きな頭で、菊や梅などの華やかな胴模様が特徴。土湯系は、頭に「蛇の目」の黒い輪と轆轤線(縞模様)の胴、細い胴はやや安定を欠き、全体的に赤と黒の印象が残る。“こけし”を見つめていると不思議に心が癒やされ、これを生んだ東北の人たちの優しい心が伝わってくる。ぜひお気に入りの“こけし”を見つければ会場に足を運んでいただきたい。



遠刈田系こけし



土湯系こけし